

町指定文化財修理解説書

和歌山県東牟婁郡那智勝浦町南平野
阿弥陀寺

種類	名称	員数	指定年月日
彫刻	妙法山大師像	1軀	昭和60年8月1日

(木造弘法大師坐像)

像高 84.5cm

[形状]

(本躰)

円頂。玉眼。面部を正面に向ける。法衣・袈裟を著け、正面左胸に袈裟の吊り紐の結びをあらわす。両手屈臂し、左手は掌を上に手の甲を膝上に置き、五指を軽く握り数珠を執る。右手は手の甲を胸に当て、掌を上に五指を軽く握り五鈷杵を執る。左腕から法衣の袖・袈裟を躰側及び正面に垂らし、右腕から法衣の袖を躰側に垂らす。衣内で結跏趺坐する。沓を牀座正面下に置く。

(台座) 覆座、牀座(屋根・肘掛け付き)。

[品質構造]

(本躰)

桧材、寄木造。布貼り、鋸下地、黒漆塗、白下地、彩色仕上げ。玉眼嵌入(水晶製)。

頭躰別材。頭部は頸部・襟内を含み両耳前後を通る線で前中後の三部からなり、前後部は各豎一材、中部は頭頂の横一材と左右各一材(両耳を含む)の豎材を矧ぐ。それぞれ内刳りを施し、襟内で差首とする。躰幹部は前面豎一材と後面は豎一材の左に細い豎一材を矧ぐ二材よりなり、肩上部の左右に各一材のマチ材を挟む。後襟に小材三材を左右に矧ぐ(中央材は後補)。両肩外側はそれぞれマチ材(躰幹部との間に前後各一材、背面は地付に至る、両脚部との間に各一材)を挟み左右各一材を矧ぎ付け、その外側の衣の広がりに横材数材を矧ぎ足す。袖口は左一材、右二材を各別材矧ぎ付け。袖内の右前脇上半部は袖材より彫り出し、下半部に別材を矧ぎ足す。袖内の左手首は右半部を袖材より彫り出し、左半部に別材を矧ぎ足す。両手首先各別材矧ぎ付け。左右腰脇材各横一材を矧ぐ。両脚部は横一材下の正面左右に各一材を矧ぎ付け厚みをもたせる。裳先は一材に先端左右二材を矧ぎ付け、両脚部と左右二本の角ダボで繋ぐ。各材内刳りを施す。躰幹部前面材の下部は両脚部の内刳りの高さに合わせて刳り上げるが、中央に像心束を彫り残す。さらに躰幹部の内刳り下部の左右に、前后面材を繋ぐ束(左右共に前三分の一は前面材より彫り出し、左方は新補材一材を右方は二材を矧ぎ足す、すべて豎材)を設ける。持物の数珠は水晶製、絹糸で纏める。五鈷杵は木製、漆箔仕上げ。沓は木製、各左右二材矧ぎか。底の粉鋸下地、内側朱漆塗、外側黒漆塗。

(台 座)

畳座は杉材、箱組。木地の上に布貼り(上面・両側)、地の粉(杉材)・錆漆・砥の粉錆をつけ、白下地(鉛白・白土)、天板は白緑下地に緑青を重ね、縁周りは高麗縁の文様を施す。

天板は前後二材矧ぎ。箱組の補強のため内部の前後に中棟三材(左右二材は新補、桧材)を渡し、さらに天板補強のため側板内面の四面に補強材を取り付ける(正背面は新補、桧材、中央中棟を挟み各二材)。箱組の正面に桧材の横材一材を矧ぎ付ける(新補)。四隅に牀座の脚材を通すための穴が開く。

牀座は桧材、錆下地黒漆塗。台輪框(四方組付、正面に桧材の新補横材一材を矧ぎ付ける)と畠座の四隅に、下から脚材を差し入れ肘掛けで前後を繋ぎ、後の脚材左右を屋根で繋ぐ。各矧ぎ目は角ダボで繋ぐ。

[損傷状況]

(本 躯)

- 1) 像全体に経年の埃が付着していた。
- 2) 肉身部の後補彩色が浮き上がり、特に面相部は著しく尊容を害していた。
- 3) 法衣・袈裟部の後補赤色(代赭か弁柄)彩色が浮き上がり著しく尊容を害していた。
- 4) 像全体の矧ぎ目が緩み、表面層が切れ隙間を生じる箇所が各所でみられた。頭部は材の矧ぎ目に後補の麦漆が厚く塗られ形状を損ね、首柄穴との間に隙間が生じ、躰部に落ち込んでいた。また玉眼押さえの綿がずれ尊容を害していた。
- 5) 法衣・袈裟(地付部)の矧ぎ目が著しく緩み隙間を生じ、矧ぎ目周辺に割損欠失や後補材の亡失箇所がみられた。また像内の前後を繋ぐ束のうち、左方の一部が亡失していた。
- 6) 各矧ぎ目に打たれる鉄釘・鉄鎚が腐食していた。また鉄錆により釘・鎚の表面層が押し上げられ、釘・鎚が露出する箇所がみられた。
- 7) 右手第二～五指の爪先が消失していた。
- 8) 背外側の後補透漆塗が浮き上がり、剥落進行中であった。
- 9) 持物(五鈷杵)の漆箔が剥落していた。

(台 座)

- 1) 牀座の漆塗が浮き上がり、剥落する箇所があった。特に脚や肘掛けが著しかった。
- 2) 牀座の屋根右端材(後補)を留めていた洋鉄釘が錆び、鉄錆により表面層が押し上げられていた。
- 3) 畠座の彩色が剥落し素地状態になり、鉄釘が錆び、天板の矧ぎ目が離れ隙間が生じていた。また牀座の脚材が通る穴が大きく見苦しかった。
- 4) 牀座の台輪框と畠座の奥行きが浅く、像を安置した際に裳先が台座から少しはみ出し不安定であった。

[修理仕様]

(本 躯)

- 1) 像全体の経年の埃は、筆・刷毛等を用い丁寧に除去した。
- 2) 尊容を害していた肉身部(頭部・両手首先)の後補彩色は竹ベラ等で丁寧に除去し、下層の当初と思われる肌色を表面にあらわし、ふのり膠(ふのり 1%水溶液と膠 2%水溶液を 9 : 1 の割合で混合、以下同じ)で剥落止めを行った。彩色が剥落し掃墨漆及び木地が表れていた箇所には、下層から現れた当初と思われる肌色の色味を元に補彩し見易い程度に尊容を整えた。

- 3) 法衣・袈裟部の後補赤色彩色も上記2)と同様の処置を行った。衿元及び背面の一部の下層には当初と思われる桧皮色がみられたため、ふのり膠を用いて剥落止めを行った。彩色が剥落していた箇所には鉛白下地の上に、下層から現れた当初と思われる桧皮色の色味を元に補彩し見易い程度に尊容を整えた。
- 4) 像全体の矧ぎ目の緩みや離れる箇所はすべて一旦解体し、矧ぎ目の膠や麦漆を丁寧に除去し、大きく離れる箇所へは薄板を差し込み、新たな膠と麦漆で接着し組み上げた。頭部は玉眼押さえの綿のずれを直し、押え木を膠で接着し、新たな煤竹の竹釘(6本)で固定した。頭部組み上げの際には首柄穴との間に生じた隙間に桧材の薄板を膠で貼り付け落ち込みを戻し、胸前・首後の釘穴痕跡箇所に竹釘を打ち込み頭部を固定した。
- 5) 法衣・袈裟(地付部)の矧ぎ目周辺の割損欠失箇所・亡失箇所は新たな桧材で補足を行った。また像内の前後を繋ぐ束のうち亡失していた左方束の一部は桧材で補足し、膠と漆で緊結した。
- 6) 各矧ぎ目に打たれる腐食した鉄釘・鉄鎌は解体の際にすべて取り除き撤去した。取り除いた釘穴・鎌穴は桧材で埋木を施し、矧ぎ目を繋ぐ元の位置に防錆処置として焼き漆を施した新たな鉄鎌を打ち込み強度を持たせ、必要な箇所にのみ真鎌釘を打ち込み、それぞれの表面を木犀漆で整えた。
- 7) 欠失していた右手第二～五指の爪先は桧材で補足した。
- 8) 背外側の浮き上がる後補透漆塗は剥落止めを行う予定であったが、下層に当初と思われる黒漆塗層が残っていたため、表面の透漆塗を除去し、必要に応じて古色(墨地)を施し見易い程度に整えた。
- 9) 持物(五鉢杵)の漆箔が剥落する箇所は、新たに漆箔を施した。

(台座)

- 1) 牀座の漆塗の浮き上がりはアクリル樹脂エマルション(商品名 プライマAC2235、原液46%)原液で剥落止めを行い、剥落箇所には錆漆で繕いを施し、掃墨漆(黒漆)で表面を整えた。
- 2) 牀座の屋根右端材(後補)を留めていた洋鉄釘は抜き取り撤去して材を一旦取り外し、煤竹の合釘で留め直し、膠と漆で緊結して表面層を整えた。
- 3) 畳座は錆びた鉄釘を抜き一旦解体し、膠と漆で接着した。補強のため前後に渡す中棟の左右に新たに各一本の桧材の中棟を新補し、さらに側板が薄く補強のため各側板内面に桧材を取り付け、真鎌釘で打ち付けた。天板と側面に布貼りを施し、錆漆で表面を整え、鉛白下地を塗り、天板に緑青と周縁から側面にかけて高麗縁の文様を施した。
- 4) 牀座の台輪框と畳座の前方にそれぞれ桧材の新材を足し膠と漆で接着した。さらに内側より真鎌釘で打ち付けて緊結し、奥行きを広げて像の安定をはかった。新材部分のうち畳座は上記3)の布貼り前に元の材と合わせてともに彩色を施し、台輪框は染料と墨で色味を馴染ませた。

以上の修理箇所はすべて古色仕上げとし、修理記録の銅札を牀座台輪框下面に打ち付けた。

[特記事項]

- 1) 頭部内刳り面(主に後頭部材)及び両脚部材矧ぎ面(左膝部上面)、畳座上面に墨書がみられた(修理記録写真No.41～46参照)。

[施工場所] 美術院京都工房

[法 量]

総 高 112.4 cm (頭頂～台座地付)
 最大張 138.3 cm (台座牀座屋根左端～同 右側)
 最大奥 77.3 cm (台座牀座台輪框正面～同 背面)
 (単位 cm)

本 躯		台 座	
像 高	84.5	台 座 高	91.5
頂上～頸	22.0	屋根 張	138.3
面 幅	16.1	屋根 径	3.5
耳 張	20.5	肘掛け 高*3	56.6
面 奥	22.7	肘掛け 奥	77.0
臂 張	62.6	肘掛け 径	3.5
膝 張	70.5	畳座 高	6.1
膝高 左	16.5	畳座 幅	115.8
膝高 右	16.3	畳座 奥	75.5
膝 奥	54.2	台輪框 高	4.1
裳 先 奥	72.5	台輪框 幅	117.4
胸 奥	27.2	台輪框 奥	77.3
腹 奥	33.0	斜線	
本躰最大張*1	111.9	斜線	
本躰最大奥*2	72.5	斜線	
持物 五鉢杵 長	20.9	斜線	
持物 五鉢杵 最大幅	5.8	斜線	

*1：法衣左袖左端～同 右端 *2：裳先～背面後端 *3：前脚肘掛け横材下～地付

京都市下京区七条通
 高倉東入ル材木町476-1
 公益財団法人 美術院

【頭部背面内刳り面 銘文】

大佛し大進のほつけう
小佛しは大ゆうほつけう
たかついし 大みや (花押)
けつりの□□
宝徳二年正月
十一日

※注
大夫法橋

【頭部右側面内刳り面 銘文】

つくりはじめ
申なり

【顎下正面内刳り面 銘文】

宝徳

二年

四月

十日

出来